

Title	「哲学」既刊総目次
Sub Title	
Author	
Publisher	三田哲學會
Publication year	1967
Jtitle	哲学 No.50 (1967. 3) ,p.E1- E18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000050-0545">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000050-0545</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「哲学」既刊総目次

哲 学

第 1 輯 大正 15 年 10 月 8 日

川 合 貞 一	Transzendente Methode
板 垣 鷹 穂	歴史学的労作と歴史家の個性
青 木 巖	プラトーンの美と芸術に対する考察
横 山 松三郎	直接経験の観察と観察態度
船 田 三 郎	フィヒテの初期に於ける国家思想

第 2 輯 昭和 2 年 7 月 8 日

高 橋 文 雄	空間の問題——カント及びコエンの理解——
新 館 正 国	社会学の一道標——Max Scheler の「文化社会学の本質と概念」——
衣 斐 久 雄	行動の性質——マックス・エーバーの理解的方法に依る考察——
小 林 澄 兄	ペスタロッチの教育原理

第 3 輯 昭和 2 年 12 月 25 日

加 田 哲 二	社会学者としてのロレンツ・フォン・シュタイン——シュタイン研究序論——
板 垣 鷹 穂	美術史に於ける価値評価の問題
茅 野 蕭 々	ショオペンハウエルによる悲劇性と現今——オスカア・ヴルツェルによる——
川 合 貞 一	Psychologische Methode

第 4 輯 昭和 3 年 8 月 3 日

常 盤 大 定	程子と仏教
小 柳 司気太	朱子哲学の研究に於ける二点の考察
青 木 巖	デカルトよりヴィコへ
守 屋 謙 二	抽象の美——ウォーリンガー学説に依る一つの展望——
城 戸 幡太郎	批判的内省——心理学的方法についての一考察——

「哲学」既刊総目次

第 5 輯 昭和 4 年 2 月 28 日

船 田 三 郎

歴史哲学の可能に関する問題 (カントとシェリングに於ける)

横 山 松三郎

識 態 と 覚

栗 林 茂

ヘーゲルの青年時代

Theodor Sternberg

Der Comparatismus (vergleichende Methode) und die Structur der Wissenschaft mit besonderer Berücksichtigung der vergleichenden Rechtswissenschaft und ihrer Geschichte

第 6 輯 昭和 5 年 3 月 1 日

川 合 貞 一

倫理学に於ける Sollen の問題

青 木 巖

トーマス・アクイナスの社会並びに国家思想

西 谷 謙 堂

ペスタロッチの社会哲学思想と社会教育思想

横 山 松三郎

視的把握に於ける露出時間の影響

(慶応大学心理学研究室報告(其 1))

宮 下 正 美

Psycho-Paidology に於ける解釈について

Theodor Sternberg

Der Comparatismus (vergleichende Methode) und die Structur der Wissenschaft. (Zweiter Teil)—mit besonderer Berücksichtigung der vergleichenden Rechtswissenschaft und ihrer Geschichte.

第 7 輯 昭和 5 年 12 月 30 日

島 原 逸 三

新実在論序説

新 館 正 国

自然と自由—カント・歴史形而上学の一考察—

西 脇 順三郎

概念と表現

ベンノー・エルドマン著

唯物論的歴史観の哲学的諸前提

後 藤 純 三 訳

第 8 輯 昭和 6 年 8 月 10 日

小 柳 司気太

東洋哲学思想の基調

高 橋 文 雄

デカルトに於ける世界観成立の秘密

守 屋 謙 二

ヴェルフリンの様式概念

青 木 巖

パルメニデスの哲学に就いて

星 野 重 顕  
栗 田 録 治

パルメニデス篇について  
児童の色彩好悪  
(慶応大学心理学研究室小研究報告(其2))

第 9 輯 昭和 7 年 4 月 4 日

常 盤 大 定  
加 田 哲 二  
青 木 巖  
栗 林 茂  
宮 崎 友 愛

大乘世界観の基調としての仮  
明治初期における社会学思想  
アリストテレスの問題法とヘーゲルの弁証法  
生の哲学者としてのヘーゲル  
純粹意志に就て

第 10 輯 昭和 8 年 2 月 18 日

橋 本 孝  
山 口 等 澍  
衣 斐 久 雄  
向 井 鏐 一  
栗 林 茂 訳  
友 田 善 二 郎

シェイラァ倫理学に於ける人格の問題  
ヘーゲル哲学に於ける結合の概念  
群 の 概 観  
全体主義に就いて  
解釈学の成立(ディルタイ)  
色彩の空間的構造と感情価値

第 11 輯 昭和 8 年 9 月 1 日

Theodor Sternberg  
常 盤 大 定  
小 柳 司 気 太  
星 野 重 顕  
山 本 万 二 郎

Begriff der Philosophie  
見性の思想的考察——達磨大師「血脈論」・  
「悟性論」・「観心論」を中心として——  
利瑪竇と明末の思想界  
プラトン対話篇「テアエテトス」  
蓋然判断について

第 12 輯 昭和 9 年 8 月 15 日

新 館 正 国  
田 中 吟 龍  
中 山 一 義  
向 井 鏐 一  
西 谷 謙 堂

社会生活の対象論的構造  
リット教育学の基礎的考察  
「学制」頒布前後事情  
宗教社会学序説  
児童に於ける色と形の知覚(1)  
(慶応義塾大学心理学研究室報告(其7))

第 13 輯 昭和 10 年 3 月 22 日

守 屋 謙 二

日本視の問題

「哲学」既刊総目次

- |        |                   |  |
|--------|-------------------|--|
|        | 山本 万二郎            | リッケルト哲学思想の発展——意味及び価値の概念を中心として——            |
|        | 松本 正夫             | 述語論理の諸特性                                   |
| 第 14 輯 | 昭和 10 年 8 月 21 日  |  |
|        | 船田 三郎             | 歴史哲学より観たる唯物史観                              |
|        | 山口 等澍             | 哲学的時間論批判                                   |
|        | 青木 巖              | 希臘 <small>ギリシャ</small> の所謂自然哲学者に就いて        |
|        | 山本 秀夫             | 大乘起信論の認識論的考察                               |
|        | 小池 喜代蔵<br>小横 山松三郎 | 触空間に於ける距離比較判断 (第一報補遺)                      |
| 第 15 輯 | 昭和 11 年 3 月 30 日  |  |
|        | 新館 正国             | 社会と認識                                      |
|        | 宮崎 友愛             | シェーラーの哲学的人間学管見                             |
|        | 星野 重顕             | プラトンに於ける魂の不滅——殊にパイドン篇を中心として——              |
|        | 松本 正夫             | 主語論理の研究                                    |
|        | 西谷 謙堂             | 重量対比の実験的研究<br>(慶応義塾大学心理学研究室報告(其8))         |
| 第 16 輯 | 昭和 11 年 7 月 31 日  |  |
|        | 山本 万二郎            | 判断意識について                                   |
|        | 青木 巖              | プラトン政治思想の序論—その背景と原理—                       |
|        | 前田 越嶺             | セネカ学説批判                                    |
|        | 林 銈蔵              | 等重量の継時的比較<br>(慶応義塾大学心理学研究室報告(其10))         |
| 第 17 輯 | 昭和 12 年 3 月 1 日   |  |
|        | 山本 快龍             | 数論派の実有論                                    |
|        | 星野 重顕             | プラトン「メノン」研究                                |
|        | 向井 鏞一             | 宗教の社会学的特質——主として普遍的宗教の場合——                  |
|        | 江口 正一             | シュライエルマッヘルの美学について                          |
|        | 小島 陽              | 色彩の記憶価値に関する一実験的研究<br>(慶応義塾大学心理学研究室報告(其11)) |

- 第 18 輯 昭和 12 年 8 月 1 日
- |         |                        |
|---------|------------------------|
| 川 合 貞 一 | 『歴史的なるもの』の本質           |
| 青 木 巖   | ゼンティールレの哲学             |
| 松 本 正 夫 | 存在の論理学—序論—             |
| 金 子 秀 彬 | 形態の複雑性とその把握時間          |
|         | (慶応義塾大学心理学研究室報告 (其12)) |
- 第 19 輯 昭和 13 年 3 月 31 日
- |         |                             |
|---------|-----------------------------|
| 山 本 万二郎 | 認識論に於ける超越の問題<br>——実存哲学的考察—— |
| 宮 崎 友 愛 | 実質価値倫理学に於ける価値観主義の限界         |
| 山 本 秀 夫 | 大乘起信論の論理                    |
| 中河原 通 之 | 分割面知覚に関する一実験的研究             |
|         | (慶応義塾大学文学部心理学研究室報告 (第15))   |
- 第 20 輯 昭和 14 年 4 月 15 日
- |                  |                    |
|------------------|--------------------|
| 小 林 澄 兄          | 技術と技術教育            |
| 佐 原 六 郎          | 社会心理学の問題——その史的概観—— |
| 星 野 重 顕          | プラトン「ユウチフロソ」篇      |
| 友 田 善二郎<br>林 銚 蔵 | 射撃の的中率と呼吸との関係      |
- 第 21, 22 輯 昭和 15 年 7 月 15 日 川合博士古稀記念特輯
- |         |  |
|---------|--|
| 船 田 三 郎 | 史家として見たるヘルデル                             |
| 山 本 万二郎 | 認識者の主体性と認識の主体性                           |
| 松 本 正 夫 | 弁証法論理の主体性格に就て                            |
| 橋 本 孝   | シェーラー社会倫理学の基本問題<br>——Gesamtperson について—— |
| 宮 崎 友 愛 | アリストテレスに於ける善の概念                          |
| 新 館 正 国 | 共同体 (Gemeinschaft) の概念                   |
| 向 井 鏞 一 | 宗 教 と 道 徳                                |
| 横 山 松三郎 | 場の構造と感情——絶対感情判断の相対性と<br>恒常性——            |
| 中 山 一 義 | 明治維新の教育政策の性格——近代日本教育<br>史序説——            |
| 小 林 澄 兄 | 国民学校の理念                                  |

「哲学」既刊総目次

第 23 輯 昭和 16 年 8 月 20 日

- |       |                 |
|-------|-----------------|
| 松本正夫  | 演繹的述語論理の分析性格に就て |
| 沢田允茂  | 行為的主体としての覚存     |
| 西谷謙堂  | 学童の虚偽           |
| 山田悌四郎 | 感情判断に於ける学習の効果   |

第 24 輯 昭和 17 年 12 月 15 日

- |      |                     |
|------|---------------------|
| 川合貞一 | 人倫の規範体系と社会の本質構造との関係 |
| 新館正国 | 社会秩序の論理             |
| 林銈蔵  | 迷路学習に於ける概念の機能       |

第 25, 26 輯 昭和 19 年 6 月 15 日 船田三郎教授還暦記念特輯

- |       |                              |
|-------|------------------------------|
| 新館正国  | 社会の起源                        |
| 西谷謙堂  | 青年学生の精神的構造<br>——青年学生の宗教(その1) |
| 向井鏌一  | 文化受容の問題——問題の素描——             |
| 山本万二郎 | 真理について                       |
| 峯村光郎  | 経済法の現代法的意義                   |
| 中山一義  | 信の現成——道元の学道論——               |
| 松本正夫  | 帰納的述語論理の綜合格                  |
| 井筒俊彦  | 回教神秘主義哲学者イブヌ・ル・アラビーの<br>存在論  |
| 西垣堯安  | 記憶に及ぼす感情の影響                  |
| 佐藤望   | 予備的態度の客観的研究                  |

第 27 輯 昭和 26 年 8 月 30 日

- |      |                                     |
|------|-------------------------------------|
| 松本正夫 | 価値論理の所属範疇への基礎付け                     |
| 井筒俊彦 | 神秘主義のエロスの形態——聖ベルナル論——               |
| 沢田允茂 | 『デカルトと実存』——実存的思惟の歴史及び<br>本質に関する研究—— |
| 神山四郎 | ボナヴェントゥラの類比的直観                      |
| 横山寧夫 | 浪漫主義と敬虔主義                           |
| 村井実  | ルソーの自然概念に就て                         |
| 印東太郎 | アイソモルフィズムの問題——知覚された点<br>の位置について——   |

第 28 輯 昭和 27 年 3 月 31 日

宮崎友愛	ブレンタノの倫理思想——実質的価値倫理学への途——
山本万二郎	カントの哲学的方法論研究
松本正夫	仏教哲学とアウグスティヌスの時間論について
高須裕三	家族存在論の一考察
立野清隆	ハイデッガーに於ける超越の問題——時間性よりする存在の構成——
佐野勝男 秋山誠一郎	向性検査に於ける「はい」「いいえ」の示す向性度についての一研究
書評 大出 晁	米国論理学界の二つの代表的近着書紹介 Hans Reichenbach, Elements of Symbolic Logic, Macmillan, New York, 1947. James F. Anderson, The Bond of Being, Herder, London, 1949.

第 29 輯 昭和 28 年 3 月 31 日

務台理作	実存と状況
山本万二郎	(承前) カントの哲学的方法論研究 (完)
大谷愛人	キェルケゴールの思惟方法——主体性及びイロニーの概念の哲学的方法論的意味——
立野清隆	ハイデッガーに於ける超越の問題 (承前)——時間性よりする存在の構成——
横山寧夫	独逸啓蒙主義の社会学
阿部隆一	学問——山鹿素行の「大学」解——
横山松三郎 小川隆 藤幸一郎	民主主義の理解——中学校、高等学校生徒の場合——

第 30 輯 昭和 29 年 3 月 31 日

山本万二郎	リッケルトに於ける——意味概念の認識論的及び存在論的解明とその批判——
村井 実	教育作用の美的理解について (上)
三雲 夏生	認識に於ける行為の意味——モーリス・ブロンデル研究. その 1——



箕輪秀二	「Cogito, ergo, sum」に就いて——精神の確立と其の近代性——
小泉仰	マックス・シェラーに於ける「愛」について
横山寧夫	知識と社会体制 (1)——知識社会学方法論の展開と課題——
高須裕三	マキーヴァー「永続平和への道」——R. M. MacIver, Towards an Abiding Peace, New York, 1943.
吉田俊郎	図形残効について
第 31 輯	昭和 30 年 3 月 31 日
村井実	教育作用の美的理解について (下)
横山寧夫	知識と社会体制 (2)——特に近代社会体制に於ける知識の諸形態と知識人の問題——
仲康	文化とパスナリティ ——現代社会学の断面——
小泉仰	直観論的価値論をめぐる諸問題
箕輪秀二	聖トマス・アキィナス著 真理と虚偽に就いて (訳)
林銈蔵	配色感情に及ぼす面積の効果
第 32 輯	昭和 31 年 3 月 31 日
橋本孝	川合貞一先生を憶ふ
阿部隆一	川合貞一先生略年譜並著作目録
小林澄兄	ヒューマニズムと教育との関係について
山本万二郎	哲学的方法論の意義とその体系形成への一つの試み
三雲夏生	ベルグソンとブロンデルの哲学における道徳と宗教についての考察——モーリス・ブロンデル研究, その 2——
横山寧夫	バロックの知識階層
仲康	教育社会学への一道標
印久	ピアノを用いて行った把持曲線に関する解析的研究
佐野勝男	学級編成替えの交友関係並に地位に及ぼす影響

大 西 久 夫

弁別学習における形成過程の問題

第 33 輯 昭和 32 年 3 月 31 日

小 川 隆

心理学における構成の問題

箕 輪 秀 二

“L'objectivation des idées”——トミスト  
認識論の一考察——

有 働 勤 吉

聖トーマスに於ける存在・真理・認識の問題  
——存在論的認識論への途——

西 村 皓

デルタイと理念の歴史についての考察

仲 康

教育社会学への一道標 (続)——E. デュルケ  
ームの教育論とその批判——

宇 野 善 康

視えることのメカニズム——明るさに関する  
知覚の諸実験を通しての随想的点描——

大 出 晁

初等及び一般回帰函数の理論とその適用  
——論理構造論研究 1——

第 34 輯 昭和 33 年 1 月 1 日

小林澄兄先生古稀記念論文集

宮 崎 友 愛

習慣の意義——道德徳育に關聯して——

村 井 実

プラトンの国家と教育

西 村 皓

教育概念の弁証法

西 谷 謙 堂

教育的行動に於ける児童心理学の意味  
——所謂「反抗」の現象分析を媒介として——

中 山 一 義

福沢諭吉のみた父百助

松 本 正 夫

女性の条件としての物自体性について  
——愛の条件としての女性について——

守 屋 謙 二

鑑賞史としての美術史

務 台 理 作

歴史哲学における人類の概念

佐 原 六 郎

社会化と社会的規範意識

山 本 万 二 郎

フッサールのカント観

山 本 敏 夫

勤務評定に関する多面的検討——法制的, 行  
政的, 技術的な側面からの吟味——

横 山 松 三 郎

ティチナーに於ける感情の概念

——史的回顧——

林 銈 蔵

配色感情に及ぼす面積の効果 II

- 小川 隆 伝書鳩のオペラント弁別——刺激継時呈示法  
における交代時間の影響——  
斎藤 幸一郎 「認知された確率」の動揺度  
沢田 允茂 “存在”，“実在”，及び“事実”

第 35 集 昭和 33 年 11 月 1 日 慶応義塾創立百年記念論文集

- 松本 正夫 存在論的認識論に関する覚書  
箕輪 秀二 帰属の類比と比例性の類比——Francisco de  
Suárez と Johannis a Sancto Thoma の  
場合——  
務台 理作 人間現実の二条件と人類の問題  
中山 浩二郎 認識の対象に関する一考察  
大出 晁 Principia Mathematica における命題関数 II  
沢田 允茂 同一律，矛盾律等の異った表現の仕方とこれ  
に関連する哲学的立場に関する考察  
立野 清隆 存在論の根本問題序説（其の 1）  
有働 勤吉 「不等性の類比」について  
山本 万二郎 フッサールのカント観（完）  
橋本 孝 シューラー人格論に於ける非合理性の問題  
小泉 仰 「行為」について  
三雲 夏生 <sup>ペルソナリズム</sup>人格主義序章——その立場の素描——  
宮崎 友愛 エロースと道徳的悪について  
小林 澄兄 道徳教育について  
村井 実 ソクラテスとプラトン——プラトンの作品に  
ついて教育史の立場から両者を区別する  
試み——  
中山 一義 慶応義塾起原考  
西村 皓 普遍妥当的教育学の可能性について  
——ディルタイの所説を中心として——  
西谷 謙堂 「うそ」について（1）——「うそ」の現象的分  
析のために——  
斎藤 幸一郎 「現実・期待」水準差の発達的变化——青年期  
心理の一特徴の量的把握の試み——

- 山 本 敏 夫 勤務評定に関する研究——教育長協議会議案  
についての法制面からの検討——
- 有 賀 喜左衛門 村落の概念について
- 仲 康 地域社会の社会変動に関する一考察  
——千葉県九十九里浜沿岸漁村の実態調査を  
通じて——
- 佐 原 六 郎 キリスト教的社会の本質
- 佐 野 勝 男 ソシオメトリー研究の発展と今日の諸問題  
関 本 昌 秀 (其の 1)——モレノのソシオメトリーの背後  
にあるもの——
- 宇 野 善 康 社会的知覚研究について——偏見基礎論への  
準備 (1)——
- 横 山 寧 夫 自然的結合と制度的結合
- 林 銈 蔵 円弧の延長の偏向について
- 印 東 太 郎 逡巡, 躊躇に関する考察——動物と人間にお  
けるコンフリクト——
- 小 川 隆 伝書鳩のオペラント弁別——刺激継時呈示法  
における補強配合の吟味——
- 大日向 達 子 伝書鳩の色弁別学習
- 横 山 松三郎 視空間に於ける長さの知覚  
山 栞 恵美子
- 吉 田 俊 郎 光覚に於ける感度と図形残効

第 36 集 昭和 34 年 8 月 5 日

- 海 津 忠 雄 建築空間の問題
- 佐 野 勝 界 索 ソシオメトリー研究の発展と今日の諸問題  
関 本 昌 秀 (其の 2)——ソシオメトリー研究のその後の  
発展 (年代的発展の傾向)——
- 立 野 清 隆 存在論の根本問題序説 (其の 2)
- 山 中 一 郎 公務員犯罪の問題点
- 山 崎 恒 夫 アメリカ合衆国における公立学校と宗教教育  
の諸問題
- Max H. Fisch The Philosophy of History, a Dialogue
- 山 本 万二郎 ドイツ諸大学哲学科講義要目に寄せて

「哲学」既刊総目次

第 37 集 昭和 34 年 12 月 5 日

- |        |                                 |
|--------|---------------------------------|
| 横山 寧夫  | 知識人の概念と類型                       |
| 山岸 健   | 家元制度に関する基礎的考察——芸術社会学における一つの問題—— |
| 山本 万二郎 | 「生命界」概念を中心とするフッサール後期思想の展開       |
| 〃      | フッサール・アルヒーフを訪れて                 |
| 西村 皓   | デュルタイの理解理論と教育学的認識の可能性について       |
| 中山 浩二郎 | 感覺的認識について                       |
| 大出 晁   | 「は」と「が」について——日本語の論理構造の問題——      |

第 38 集 昭和 35 年 11 月 30 日

- |         |   |
|---------|---|
|         | 横山松三郎先生古稀記念論文集                                      |
| 小林 澄兄   | 今日のための『エミール』  |
| 務台 理作   | 人間疎外と実存思想   |
| 佐原 六郎   | サクソン塔とその社会的背景                                       |
| 有賀 喜左衛門 | 家族と家  |
| 山本 万二郎  | 「生命界」概念を中心とするフッサール後期思想の展開 (続き)                      |
| 山本 敏夫   | 公立学校事務職員に関する研究——主として法制的検討——                         |
| 松本 正夫   | 存在論的認識論再論   |
| 小川 隆    | 伝書鳩のオペラント弁別——刺激継時呈示法における習得基準の分析——                   |
| 沢田 允茂   | 哲学に於ける機械論的説明  |
| 横山 寧夫   | デュコトミー的思考——現代社会における危機の一断面——                         |
| 佐野 勝男   | ソシオメトリー研究の発展と今日の諸問題 (その 3)——ソシオメトリー研究の部門別発展傾向 (1)—— |
| 印 東 太 郎 | 輝度の加法性について [色彩スケール論 3]                              |
| 斎 藤 幸 一 | 一般化判断の一研究   |

第 39 集 昭和 36 年 3 月 1 日

菅 沼 貞 三  
仲 康

良寛のこと

デュルケーム社会学における根本問題——晩年の講義録「道德教育論」を中心として——

箕 輪 秀 二

Analogia 研究 (1)——トマスの analogia attributionis にみる存在論的基礎とこれを廻る問題

井 上 坦

感覚及び知性作用の共通源泉

——その発生論的探究の試み——

牛 田 徳 子

プレディカメンタとプレディカビリアについて

立 野 清 隆

存在論の根本問題序説 (其の 3)

——アリストテレス第一哲学の存在論的根拠に関する考察——

土 屋 好 重

近代的ビジネスの実践哲学

山 根 和 平

判断の Presupposition について——Aristoteles 論理学の解釈に関する研究序説——

金 子 秀 彬

産業心理学における情報理論の適用

第 40 集 昭和 36 年 10 月 1 日

西 村 皓

体験の思想と生の教育学 (上)

井 上 坦

均衡の概念と教育の基礎理論

高 橋 巖

対象的思惟とゲーテの古典主義的芸術観の成立

大 谷 愛 人

キルケゴールによるアンデルセン批評の歴史的背景——処女出版『いまなお生ける者の手記より』について——

有 働 勤 吉

Analogia secundum intentionem tantum の一考察——トマスを中心として——

柏 木 英 彦

エギディウス・ロマヌスにおける esse と essentia——Theoremata de esse et essentia について——

山 岸 健

家の存続について

大 出 晁

集合と外延

論 評 印 東 太 郎

沢田允茂氏の「哲学に於ける機械論的説明」について

「哲学」既刊総目次

論評 沢田 允茂

象は鼻がながい——「は」と「が」についての一つの意見——

第 41 集 昭和 36 年 12 月 25 日

松本 正夫

「存在の類比」の形而上学的意義

立野 清隆

存在論の根本問題序説（其の 4）

池上 明哉

虚無意識の構造についての試論

中山 一義

花と幽玄と器と——一世阿弥の稽古思想——

西村 皓

体験の思想と生の教育学（下）

香山 芳久

科学教育と芸術教育の関係についての考察

横山 寧夫

保守と社会構造

古崎 敬

明暗対比現象とその生理学的基礎

井上 恵美子

知覚における学習の問題

論評 沢田 允茂

印東太郎氏への答え——機械論的説明における二、三の問題——

論評 大出 晁

沢田氏の論評に答える——ふたたび「日本語の論理構造の問題」をめぐって——

第 42 集 昭和 37 年 9 月 25 日

中山 一義

年来稽古——一世阿弥の稽古思想——

藤江 正通

日本人の自然観

小泉 仰

現代アメリカ倫理学

信沢 緑

「ヘーゲルの体系断片」について

牛田 徳子

任意な範疇概念形式としてのプレデイカビリア

小川 隆

刺激汎化研究の現在

宇野 善康

評価の諸基準に関する因子論的研究

——偏見基礎論のための準備（2）——

仲 康

デュルケーム社会学における個と全の問題

——J. モヌロと G. ギュルヴィチのデュルケ

ーム批判を通じて——

第 43 集 昭和 38 年 1 月 25 日

松本 正夫

スコラ的抽象理論の同一哲学的論拠克服の問題

大出 晁

アリストテレスの三段論法における格の問題

- |             |  |
|-------------|--|
| 柏 木 英 彦     | エギディウス・ロマヌス《Quaestiones disputatae de esse et essentia》に関するノート   |
| 三 浦 和 男     | 「人間疎外」の観点からなされるマルクス解釈への疑問  |
| 八 代 修 次     | Pieter Bruegel——素描による風景画の一考察——   |
| 海 津 忠 雄     | 初期ギリシアの青年像   |
| 山 岸 健       | 寺院と家元制度  |
| 宮 家 準       | 修験道の思想——修験者の思想と行動 1——  |
| 中 山 一 義     | 命には終りあり、能には果てあるべからず——世阿弥の生涯稽古思想——  |
| 書 評 有 働 勤 吉 | L. M. Régis, O. P.; Epistemology, (Translated by I. Ch. Byrne), The Macmillan Company, New York, 1959, pp. 549 |

第 44 集 昭和 38 年 12 月 20 日

- |           |   |
|-----------|---|
| 中 山 浩二郎   | 「受けとるもの」と「受けとられるもの」   |
| 池 上 明 哉   | 意識の志向性と対自存在——サルトル研究 1——   |
| 藤 江 正 通   | 画法と画趣——点・線・画とリズム・ハーモニー——  |
| 大 淵 英 雄   | 明治初期における五戸組——長野県諏訪市湖南区南真志野——                                    |
| 高 橋 たまき   | 刺激般化勾配——接返反応における場合と回避反応における場合の比較——                              |
| 中 山 一 義   | 花の公案——世阿弥の稽古思想——  |
| 書 評 山 岸 健 | 森岡清美著：真宗教団と「家」制度<br>創文社 昭和37年12月発行 3,500円 A5判<br>本文 662頁 索引 29頁 |

第 45 集 昭和 39 年 12 月 20 日

- |         |  |
|---------|--|
| 松 本 正 夫 | 離存形相の質料・形相論的構成について                           |
| 有 働 勤 吉 | 判断の真理とその基礎                                   |
| 宇 野 善 康 | コミュニケーション研究覚書——人間性への指向と George Gerbner の理論—— |



佐藤方哉	行動理論構成の論理
中山一義	花の公案(2)——世阿弥の稽古思想——
井上坦	Rousseau の“nature”と“vertu”が意味するもの

第46集 昭和40年2月14日

神山四郎	橋本孝先生古稀記念論文集
松本正夫	歴史的説明の論理の問題
	弁証法論理と形式論理について——存在乃至対象の論理からみた両者の関聯——
箕輪秀二	トマスの analogia
中山浩二郎	認識者の様式と思惟の形式について
大出晃	Quine の集合論
沢田允茂	目的および価値等の事実よりの導出
立野清隆	ハイデッガー「根拠の命題」
有働勤吉	存在論における対象の経験性
山本万二郎	フッサール現象学における生命界の階層的構造と歴史
池上明哉	サルトル自由論の基本構造
小泉仰	ジョン・スチュアート・ミルの幸福と快樂主義的背理
三雲夏生	M. Blondel の Normative
宮崎友愛	道徳体験の根源的構造——罪意識と良心——
山崎照雄	ヘーゲルにおける「市民社会」の概念——その成立の背景と「国家」に対する問題的關係——
守屋謙二	日本美術における「古典的なもの」
菅沼貞三	大雅画禪の説
八代修次	ブリュエールとマニエリスム
宮家準	修験道の入峰修行におけるシンボリズム
仲康	諏訪のマキ
佐原六郎	諏訪市湖南地区南真志野の教育——現地調査中間報告——
山岸健	町内会の組織と機能

- 横山 寧 夫 従機能の概念——R. Merton の dysfunction  
概念の再検討——
- 小川 隆 感性統制下の条件づけ
- 井上 坦 J.-J. Rousseau の宗教——及びそれと教育の  
関係——
- 村井 実 道德は教えられるか
- 中山 一 義 学貧之説——『正法眼蔵随聞記』を読む——
- 西村 皓 「ゲートと教育との関係, およびゲートに対す  
るわれわれの視角について
- 山本 敏 夫 イギリスの道德教育
- 橋本 孝 回想七十年

第 47 集 昭和 40 年 12 月 20 日

- 松本 正 夫 存在の自明性と物自体の仮設について
- 大淵 英雄 村落生活と消防組——長野県諏訪市湖南区南  
真志野——
- 横山 寧 夫 神秘主義の社会学——Meister Eckhart と  
その時代——
- 小林 澄 兄 「交わり」の問題を中心として
- 西村 皓 ゲートにおける人間的自然の概念とその根本  
直観について

第 48 集 昭和 41 年 3 月 15 日

- 三浦 和 男 唯物史観と人間
- 牛田 徳 子 質料形相論による人間理性の概念
- 宮家 準 修験道の験術——そのメカニズムと世界観——
- 山岸 健 芸術社会学概観
- 井上 坦 社会的平等への主張の根拠について  
——J.-J. ルソーの場合——
- 西村 皓 ゲート教育論の人間学的基礎づけへの一つの  
試み

新刊紹介： 間 瀬 啓 充

分析的宗教哲学の形成

第 49 集 昭和 41 年 12 月 9 日

- 海津 忠 雄 ハンス・ホルバインの「死の舞踏」
- 仲 康 湖南の人々

「哲学」既刊総目次

佐 藤 方 哉  
檜 山 佳 子  
西 村 皓

単純作業場面での心理学的能率

ドイツロマン主義教育学研究への一試論  
——とくにエルンスト・モリッツ・アルント  
の陶冶概念について——

柏 木 英 彦

「創造と *Possibile Esse*」覚え書